

コード No. 21-S-008

提出日：令和 4 年 4 月 16 日

令和 3 年度「長期化するコロナ禍により深刻な被害を受けている

フィリピン山村への支援」報告書

特定非営利活動法人フェア・プラス

事務局長 河西 実

1. プログラムの目的

当団体が長年交流し、フェアトレード事業を通じて支援を行ってきているフィリピンの山村マリナオ村は、2019 年末の大型台風による甚大な被害、その後の 2020 年からの新型コロナ感染拡大によるロックダウン等により日々の食事にも困窮する苦しい生活に追い込まれた。

2021 年に入り、日々の最低限の食事は取ることができるようになったが、長期化するコロナ禍により村の人たちの暮らしは心身とも疲弊してきていた。フィリピンの農村の人たちにとって 11 月の感謝祭、12 月のクリスマスは大切なイベントであったが、それをお祝いする料理の食材を手に入れることができない状況にあった。

当団体では、本プログラムにより鶏肉や豚肉を村の人たちに提供して、この 2 つの大切なイベントを家族団らんでお祝いしてもらい、疲弊した心を癒してもらうことを目的とした。また、この活動を通じて、厳しい状況が長期化する中、遠い日本に村の人たちに心を寄せる人たちがいることを知ってもらい、村の人たちを勇気づけることを目指した。

2. 主な活動内容・スケジュール

2021 年 10 月～2022 年 3 月、当団体のアルバイトスタッフがフィリピン・マリナオ村のカウンターパートであるサンラモン・アバクラフト生産者組合代表と継続して連絡を取り合い、感謝祭、クリスマスで村の人たちに配る食料の具体的な計画の調整を行った。また、二つのイベントが終わった後も食料配布の村の人たちへの影響について確認し、2022 年 4 月以降に当団体が村の人たちへの適切な支援を行うため求められる活動内容について調査を進めた。

2021 年 11 月、カウンターパートのアバクラフト生産者組合に購入資金を提供し、州都カリボ市へニワトリ、お米などの買出しに行ってもらった。生産者組合のメンバーがニワトリを捌き、お米とともに小分けして袋に詰め、苦し生活を起こっている村の人たち約 120 世帯に配布した。(マリナオ村サンラモン集落の家庭数は約 250 世帯)

2021 年 12 月、アバクラフト生産者組合に購入資金を提供し、カリボ市へ豚一頭とお米などを購入してもらった。豚を捌いて小分けして村の人たち約 130 世帯に配布した。満足なお米も購入できないでいる貧しい家庭には併せてお米を手渡すようにした。

3. 助成を受けた活動の報告 (様子がわかる写真等があれば貼付してください)

【2021年11月感謝祭】



リを捌く】

【鶏肉と他の食材を小分けして袋に詰める】



たちに食材を配る】

【取りに来れない村人へは家を回って】

【2021年12月クリスマス】



【豚丸ごと一頭を捌いて】



【お米も一部の家庭に配って】



た村人たち】

【楽しくクリスマスの食事を取る子どもたち】

4. 活動の成果（成果物などがありましたらご紹介ください）

2021年のフィリピンでの新型コロナ感染の拡大は、地方の農村部まで拡大し、7月にはマリナオ村でもクラスターが発生しロックダウンされた。2020年以上に厳し状況に置かれ、最低限の食料を得ることはできるようになったものの、フィリピンの農村の人たちにとって最大のイベントであるクリスマスや一年の収穫を祝う感謝祭に、多くの家庭ではそれを祝うための食材も購入することできない状況にあった。

当団体から村の人たちに感謝祭とクリスマスのイベントを祝う食材を提供することにより、村の人たちの家庭で楽しい団欒を過ごしてもらうことができ、将来に向けての希望を持ってもらうことができたのではと考える。

また、厳しい状況の中で、日本に村の人たちに心を寄せて継続して支援を行っている人がいることは、村の人たちを勇気づけ、前に向かって進んでいく力になったのではと感じている。

5. 今後の課題

2021年に行った食料支援は、長期化する新型コロナ感染の拡大により疲弊したマリナオ村の人たちに、毎年祝ってきている感謝祭とクリスマスを少しでも例年通りに家族団らんで楽しんでもらうことにより、将来への希望を持ってもらうことに役立ったと考える。

ただ、コロナ禍から抜け出し生活再建を図っていくためには、村の人たちが長年大切に守ってきた伝統のクラフト作り「アバカ・マクラメ編み」の復活を図っていくことが今後の大きな課題となっている。

マクラメ編みの繊維を採取しているアバカの木々は、2019年末の大型台風により大きな被害を受けているが、その復活のための植林作業は2020年、2021年と新型コロナ感染拡大によりほとんど行うことができずにいる。コロナ禍が沈静化したのちに、アバカの本格的な植林を行っていく必要がある。

伝統のマクラメ編みの技法についても、2019年まで毎年若い世代へのトレーニングを行って受け継いできているが、コロナ禍により過去2年間はほとんど行われていない。コロナ禍が沈静化したのちは、伝承のための本格的なトレーニングを一刻も早く再開する必要がある。

さらに、村の人たちが作ったアバカ・マクラメ編みの製品の販売先の市場が、コロナ禍により日本、フィリピン、第三国とも消失してしまっている。2022年以降、再度積極的に販売先の開拓に取り組んでいくことが求められている。

2022年以降、マリナオ村の人たちの暮らしの再建のため、このような取り組みを村の人たちが行っていくことができるよう、当団体としても粘り強い支援を行っていくことが求められている。

以上